

2019年7月16日

報道機関各位

アーティストファミリーレジデンス IN 岩見沢の実施（開催）について

北海道教育大学岩見沢校  
芸術・スポーツビジネス専攻  
アーカイブ班 学生一同

この度、アーティストファミリーレジデンス IN 岩見沢を実施（開催）いたします。

この事業は、大阪府枚方市在住のアーティストファミリー伊吹一家を岩見沢市にお招きして令和初の夏休みの期間芸術作品を制作し、岩見沢市内の会場でお披露目するものです。

つきましては多くの方々へ周知いたしたく、取材・報道の程、よろしくお願い申し上げます。

記

《滞在期間》2019年7月25日（木）～8月12日（月）

《会場》岩見沢市上幌集会所（岩見沢市栗沢町上幌350）

+栗沢工芸館（～8月5日）

まなみーる（岩見沢市民会館）（8月6日～12日）

《滞在アーティスト》

伊吹 拓（画家）

伊吹 尚子（陶芸家）

伊吹 音（小学4年生）

《お披露目日時及び展示会場》

令和元年8月12日から8月末日

まなみーる（岩見沢市市民会館）

ロビー壁面及び二階ガラス面

◆滞在アーティストについて

アーティストファミリーである伊吹一家は、今回の滞在で一人一人が岩見沢で形にしたものを作品にする。

伊吹拓さん（41）は画家で、主に油彩による抽象表現に取り組んでおり、関西を中心に活動している。彼の作品は油彩画にもかかわらず水彩画のようなタッチで、色彩を巧みに使用した作品がどれも目を引くものとなっている。今回の滞在では幅3.6メートルという大きなサイズの作品製作を予定しており、どのような作品が出来上がるのか注目していきたい。

また、一人で制作するのではなく、多くの人々とコミュニケーションをとりながら作品制作に取り組みたいと語っている。

伊吹尚子さん（43）は陶芸家で野原に咲く花や鳥、子供のしぐさなど身のまわりのものに心を動かされたものを作品にしており、使ってくださる方の気持ちの中で小さな明かりが灯るような器をめざして作成していると語る。彼女の作品はどれも優しさや温かさを感じることができるもので、尚子さんの温かい人柄が作品に表れているようだ。

伊吹音さん（9）は伊吹一家の期待の星である。今回の滞在では、岩見沢の自然を取り入れた作品を制作したいと語っており、どのような作品が出来上がるのか非常に楽しみである。

#### ◆アーティストファミリーインレジデンス IN 岩見沢の目的

今回のアートプロジェクトでは、地域の人々が芸術に興味を持つことを目的としている。プロジェクト名の由来となるアーティストインレジデンスとは、国内外からアーティストを招き、滞在期間中の活動を支援する事業のことを指す。今回は家族全員を岩見沢市に招き滞在させるため、注目度の高いアートプロジェクトとなるだろう。

#### 【お問い合わせ先】

事業責任者：宇田川 耕一  
北海道教育大学岩見沢校  
芸術・スポーツビジネス専攻 教授  
〒068-8642・岩見沢市緑が丘 2-34  
Phone/Fax:・0126-32-0259（直通）  
携帯 090-9671-0565（宇田川）

添付資料：作品に関するアーカイブ班学生4名の感想

#### ・手嶋 勇斗 アーカイブ班 班長（岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻3年）

岩見沢市にある喫茶店「サーバルコーヒー」で、プロジェクト内容の練り合わせ・伊吹一家の作品を鑑賞した。

伊吹拓さんの作品は、輪郭のある線はなく抽象的なものばかりだった。色彩豊かであり、大胆なタッチとともに繊細な色遣いを感じる部分もあった。全体的にモヤモヤが広がって不思議な印象を抱いた。何をイメージしたのか、拓さんが何を感じてこの作品を作成したかが非常に気になった。作品の奥に空想の空間が生まれ、底の中に引き込まれる感覚になり、見て楽しめる作品でもあった。

伊吹尚子さんは陶芸作品を制作している。彼女の作品はかわいらしい装飾が施されている。花瓶や湯飲み、茶碗などもあり種類は豊富である。優しい見た目であるため、使用しや

すく誰にでも好かれやすい作品ではないかと思う。日常の食卓に変化をもたせたいならば、この茶わんや湯飲みを使うと良いだろう。自然と笑顔になるのではないだろうか。

・**安達 可奈** (岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻3年)

近年、全国各地でアーティストインレジデンスが実施されています。これは、国内外からアーティストを招聘し、一定期間制作活動を行うというものです。しかし、芸術家一家が行うケースは今までになく、今回が日本初の実施といわれています。

今回岩見沢市で滞在制作を行うのは、大阪府枚方市在住のアーティストファミリー、伊吹一家です。7月25日から8月12日にかけて、市内に滞在しながら制作活動を行います、

夫の伊吹拓(いぶきたく)さんは画家として活動しています。抽象的な画風と油彩でありながら水彩画のようなタッチが特徴です。妻である伊吹尚子(いぶきなおこ)さんは陶芸家として活動しています。カップや一輪挿し、蓋物などを中心に製作し、そのモチーフは花や鳥、子どものしぐさなど、身の回りの情景となっています。柔らかなデザインタッチと淡く温かみのある色合いが特徴的です。また、今回のレジデンスで注目となるのは現在9歳で小学4年生の伊吹音(いぶきおと)くんです。制作に先立ち、岩見沢市の自然を取り入れた作品を制作すると意気込んでいます。音くんがどのような作品を作り上げるのか、目が離せません。

作品制作は、岩見沢市上幌集会所を中心に行われ、まなみーる岩見沢市民会館ロビーにて展示されます。尚、制作は公開形式のため、一般客は自由に制作風景を撮影することができます。伊吹さんに声を掛けることもできますので、積極的に話しかけてみてください。

また現在、伊吹拓さんと尚子さんの作品はSERVAL COFFEE(岩見沢市3条西4丁目)にて展示・販売されています。公開制作に向け、一足早く作品の魅力を味わってみるのはいかがでしょうか。

尚、今回のアーティストファミリーレジデンスIN岩見沢では、北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツビジネス専攻3年生が授業の一環としてアーカイブ作成を行います。期間中にアーティストや展示来場者へのインタビューを実施し、SNS等で発信を行いながらアーカイブ作成をする予定です。

・**落合 美優香** (岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻3年)

今回の実施に当たり、岩見沢市内にある喫茶店「サーバルコーヒー」にて、伊吹一家の作品に触れてみた。

伊吹一家の伊吹拓さん(42)は絵画作品を制作している。油彩による抽象表現に主に組み込んでおり、関西を中心に活動している。拓さんの作品は、キャンパス全体に様々な色彩を広げ、はっきりと何かを表現はせず、鑑賞者の想像に任せたものになっている。

例えば、下の写真の作品は、キャンパス全体が黒の色彩で染められ、所々に白や紫、青、黄、緑といった色彩が散らばっている。この作品は、鑑賞者をどこか不安にさせ、答えが見

えない不安定な気持ちにさせるように感じた。またはどこかにつながる闇の世界。その中に



ちりばめられている冷たい色彩は、この世界の不安や悲しみ、辛さ、怖ろしさ、無知、不明、そんな様々な感情が入り交ざり、この世の闇を表現しているのだろうか。あるいは、壁に大きな穴が開いて、そこは、この世界では無い、どこかの別の世界とつながっているのかもしれない。

伊吹一家 2 人目の伊吹尚子さん(43)は陶芸作品を制作している。自然を基調とした絵が描かれた陶器が特徴で、野原に咲く花や鳥、子供のしぐさなど身の回りのものに心動かされたものを作品にしている。

左下は実際に尚子さんが制作した作品で、子供と鳥と自然が陶器という作品媒体で調和を生み出している。とても和やかで、優しい作品である。また、その下の作品は、花などの自然がモチーフにされているが、その絵は自然的ではなく規則的で、どこか人間の手が増えられた、整った自然のようにも見える。野性的な自然の美しさだけでなく、人間の手が増えられ、整備された草花の美しさも表現しているようも感じる事が出来た。

また、これらのコップや湯飲みなどの陶器作品が私たちの食卓に添えられれば、食べ物との調和も生み、料理と陶器がもう 1 つの新しい芸術作品として食卓が彩られる。食卓が彩ら



れば、より一層家族との  
会話が弾むだろう。

今回のレジデンスにあたり、岩見沢の自然をどのように捉え、作品に表現していくのか、期待が高まる。

さらに、伊吹一家の3人目、伊吹音くん(9)も今回のレジデンスに参加検討中であるそうだ。音くんは固定して取り組んでいる芸術分野は無く、現在様々な作品制作に取り組んでいる。冬季に一度初めて岩見沢を訪れ、下見をした際、普段見慣れない大雪にとっても興奮したそうだ。今回のレジデンスは夏休み期間での実施となるが、夏の岩見沢をどのように感じ、どのように表



現するかも楽しみ  
である。

伊吹一家は初めての岩見沢での滞在となり、見たり聞いたり感じたこと全てをどのように受け止め、どのように作品と



して表現するのか。そして、どのような化学反応が起こるのか、非常に興味深い。  
もしかしたら、私たちが、まだ、知らない岩見沢を見せてくれるかもしれない。

・寺田 彩乃 (岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻3年)

今回滞在するのは夫・伊吹拓さんと妻・尚子さん、息子音さんの3人家族である。彼らは大阪府在住のアーティスト一家であり、今夏、岩見沢での滞在制作に挑む。彼らの作品は市内にある「サーバルコーヒー」の店内にて先取りして楽しむことができる。

拓さんは1977年に京都で生まれ、関西を中心に油彩による抽象表現に取り組んでいる画家である。ギャラリーでの個展や、ショールームでの展示、こども園の外壁画制作など半野外にも作品を展開させ、多岐にわたり活動している。彼の作品には大胆な色、面の広がりがあり、遠くで観るときと近くで観るときには大きく印象が変わる。絵画に近づいて観ると、ペインティングナイフで風の流れのように描かれた凹凸の中に、赤、緑、紫、青、黄色、が入り乱れている。まるで宝箱の底にきらめく宝石のように、鑑賞者にドキドキを与えてくれる、色彩豊かな作品である。

尚さんは1974年に神戸で生まれ、拓さんと同じく関西のギャラリーやサロンで活動している陶芸家である。2001年、2005年に朝日陶芸展での入選経験を持つ。彼女が作る陶器には明るい朝日が射す子ども部屋のような暖かさと、柔らかさがあるように思う。母であ



る彼女と、女性としての彼女、アーティストとしての彼女の意識が1つの陶器の中に共生しているように感じる。器の内側、取手や蓋など細部にも陶器へのこだわりと愛情が見え、作品1つ1つが遊び心満天である。野原に咲く花や、鳥、子どもの仕草など、身の回りのもの

から発想を得ており、自然で爽やかな表現が魅力的である。

音さんは現在9歳の小学4年生で、彼にはまだ決まった表現分野はないようだ。両親の感性と、岩見沢で見聞きしたものから自由な発想を得て、実に自由な制作を行ってくれるだろう。

北海道という地で、彼らが未知の自然や人と出会い、また家族の中のふれあいの中で新たな作品を生み出していく過程を学生、市民一体となってアーカイブする。アーティストひとりひとりの作品にも注目したいが、伊吹一家が家族として、この岩見沢でのレジデンスで何を得ていくのか。このアーカイブは、彼らの作品制作だけでなく、彼らの「ふれあい」のアーカイブにもなっていくだろう。